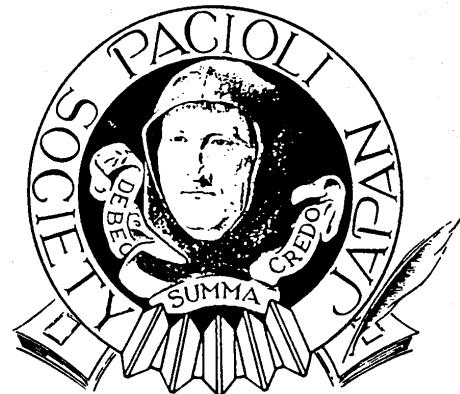


# Accounting, Arithmetic & Art Journal



NO.19

The **PACIOLI SOCIETY JAPAN**

2005.08

## ハーウッド会計稀観本マイクロ集成の刊行

本誌No.8 (1995.11) に「ハーウッド簿記・会計学文献コレクション」と題して紹介いたしました1, 293点の文献は1997年に久留米大学御井図書館(福岡県久留米市御井1635番地)に収蔵されました。このたび、丸善株式会社が同コレクションのマイクロ版集成(16ミリマイクロフィルム208リール)を刊行しました。これによって世界会計史上の数々の稀観本がよりいっそう身近な存在となりました。

もともとthe Herwood Library of Accountancyは15世紀から19世紀後半までに出版された会計関連書籍をニューヨーク在中のHerwood会計士が1930年代までに収集したものであった。うち、60冊は会計史や書誌学に関するもので、残りの1,230点余が簿記会計のテキストや算術、計算速見表、数学補助教材、商人のための取引入門書、法令、規則集などである。地理的にはイタリア(66点)に始まり、オランダ(43点)、フランス・ベルギー(62点)、スペイン・ポルトガル(16点)、ドイツを中心とする中央ヨーロッパ(140点)、さらには英国(349点)、アメリカ・カナダ(584点)、日本(2点)に関する集書である。

この種のコレクションで著名なものはイングランド・ウェールズ勅許会計士協会やハーバート大学、ロンドン大学がある。ハーウッドはこれらに次ぐ集書量を誇り、日本大学商学部集書される会計関係蔵書量よりも多い。

イタリアはパチョーリの『スμμα』(1494)に始まり、カルダーノ(1539)マンツォーニ(1574)、カサノバ(1558)、ピエトラ(1586)、モスゲフティ(1610)、フローリ(1677)などを揃え、フランスではイルソン(1678)、ドラ・ボルト(1685)、バルーレーム(1742)、英国ではリセット(1660)、コリンソン(1683)、ホーキンス(1689)、ハットン(1695)、リカード(1707)ニコラス(1711)、マルニム(1718)、ウエプスター(1719)、アメリカではグードリッチ(1793)、ミッチェル(1796)、ニコールズ(1797)、日本のものには福沢諭吉の『帳合之法』(1873)と小林よし儀秀『馬耳蘇氏記簿法』(1875)があり、これらはすべて初版本である。

詳細は丸善株式会社(Tel.03-3272-3865)・学術情報ナビゲーション事業部にお尋ね下さい。



## 12世紀から14世紀におけるドイツの修道院の家政について

平 伊佐雄

### はじめに

会計史上において名高いルカ・パチョーリは、イタリアのボルゴ・サンセポクロで生まれ、フランシスコ会の修道士（フランシスコ会コンヴェンツァル派）となり、後には大学の教師として活躍した人物である。特に彼の著したスムマは、その中に簿記のシステムを解説した部分があり、それが簿記・会計の歴史において高く評価されてきたのは周知の通りである。一般的評価として西欧の教会・修道院は、西欧における学問や文化を担ってきたという歴史を持つとされているから、その意味では、パチョーリもその例に漏れず大きな貢献をしたといつてよいだろう。

今回の報告では、修道士の学問的素養という点ではなく、修道院自体における家政に焦点を当ててみたい。しかし、パチョーリとは修道士というカテゴリーの関連がある故、一修道会の修道院の経済活動についていきなり解説する前に、まず西欧における修道院の始まりとその普及について簡単に概観してから、中世ドイツにおけるシトー会修道院の修道士たちの経済活動の一端を紹介したいと思う。

### 1 修道院とは、一修道生活、修道院の始まり

さて、修道生活の始まりがどこにあったのか、誰が始めたのか、このような問いに答えるのは以外にも困難である。その始まりは、明確にはっきりと解っていないからである。しかし、修道生活をキリスト教徒一般に認められる現象として、あるいは、キリスト教修道制の始まりとして考える場合には、エジプトのコプト人による修道生活をその発端とするのが妥当であろう。その様子は、アレクサンドリアの司教アタナシウスの「聖アントニウス伝」、パコミウスの「修道戒律」等によって知ることが出来る。無論、エジプトには他に無名の砂漠の禁欲者がたくさんいたと思われるのだが、アントニウス（356年没）やパコミウスが記録に残る著名人である。アントニウスが砂漠に向かったとされるのは275年頃で、彼はそこで隠修者的な生活様式を行う修道者集落を形成したといわれる。

それに対して、パコミウス(346年没)は、共同の修道院生活様式の創始者と呼ばれる。元来隠修者であったパコミウスは、兄弟的共同体をもたらした原始教会への回帰を意図して、テーベのタベニシにて修道者の共同生活を行う修道院生活を考え、修道生活を秩序づけるための修道規則を著した。従って、共同生活を企図するパコミウスは、この点でヨーロッパの修道院の先駆的な形態を創設した人物として見なされている。

パレスチナでは、シルヴァヌス(380年没)が、ゲラサに修道院集落を創設した。エルサレムでは、380年ころ大メラニアが、ルフィヌスと共にオリブ山に修道院を創設。小メラニアも、5世紀に修道院を設立している。また、ヒエロニムスは、ベツレヘムに入って男子修道院・女子修道院を創設した。しかし、ラテン人による創設であるこれらの修道院は、創設者の死によりその名声は失われ、ギリシア・ビザンツ教会の修道院共同体に至ることになる。

シリアでは、エジプトにおける展開とは別に、独自たる修道制以前の禁欲から修道制が成立した。シリアにおいては、キリスト教は、最初から禁欲的要求と共にあり、修道制は禁欲実践へと至ったのである。当初、シリアで支配的であった修道生活様式は、隠修者集落を呈したものであったが、遅れて共住制が姿を現した。しかしながら、シリアにおいて禁欲は、隠修制の中でも特徴ある形態を持ち、シメオン(390-459)に代表されるように柱上行者などもあらわれることになる。

小アジアでは、バレイシオス(329-379)が重要な役割を果たした。もともと、シリアの北カッパドキア一帯に修道生活を広めたのは、アルメニアのセバステの司教であるエウスタティオス(300-377)であるのだが、彼に勧められてアテネ留学の後に修道生活に入ったバレイシオスは、55項の「大戒律」と313項の「小戒律」を執筆したため、後世に名を残すことになった。当戒律は、397年頃にルフィヌスによってラテン語に訳された。それが「修道士規則」(インスティテュウ

タ・モナコールム) である。バレイシオスの修道的活動を文書化したこの修道士規則は、東方の修道生活の思想的土壌となったのである。エジプトを除けば、東方における共住修道制は、このバレイシオスに負っているといえる。

ビザンツでは、テオドシウス帝の治世(379-395)の間にコンスタンティノーブルにて修道制が浸透し、都市内に修道院が創建された。しかし、都市の修道院は、教会生活と政治生活を接触させたため、コンスタンティノーブルの修道士は、5世紀における神学者たちの正統と異端といった争いに参加することになった。

修道生活はエジプトからパレスチナ、シリア、小アジアへと広まったという見方もできるのだが、エジプトが起源と思われないものもある。北方起源といわれる小アジア出身のカリトンの活動に代表されるものがそれであり、散居修道院(ラウラ)という概念を持っている。狭い溪谷に存在して、谷の斜面には、修道士たちの僧房・洞窟がある。



## II 西欧修道制の始まり

エジプトにおける修道生活は、その後、修道士によって西方に広まり、4・5世紀にはその発展が見られた。アレクサンドリアの司教であったアタナシオス(296-373)は、アリウス派論争に巻き込まれて、5度もアレクサンドリア追放を受けた。追放された彼は、第1回、第2回の亡命の際に、エジプトの修道制をローマやトリアーといった諸都市に伝える役割を果たすことになる。また、396年にヒッポの司教となったアウグスティヌス(354-430)は、修道的生活形態にこだわり、教会の中に修道院を建て、聖職者たちに共同生活を迫っている。これは司祭生活と修道生活を結びつけることになった。トゥールの司教マルティヌスは、同志の禁欲者たちをトゥールのマルムティエ修道院に集めて共住生活を行った。生活の仕方は、禁欲的俗世放棄の隠修者的性格をもつものであったが、他方でマルティヌスは、修道士たちを宣教的活動へと向かわせたと言われている。ローヌ川溪谷、マルセイユ、地中海沿岸に位置する島々、とりわけレランには、独特な修道院群が形成された。ホノラトゥス(350-429)が創設したレラン修道院(405-410 創設)は、南フランスのローヌ川流域に司教や修道士を提供し、中世初期の南フランスのキリスト教化に貢献をしたと言われる。このレラン島にある修道院は、近代に入って寛律シトー会(オブセルバンテス)の修道院として存続した。マルセイユでは、ベツレヘムで修道者になったとされ、エジプトの修道者たちの元に長くとどまった経験をもつヨハネス・カッシアヌス(365-435)が、2つの修道院を設立している。

マルティヌスの修道制とローヌの修道制の他に、別のタイプの修道者がガリアに到達していた。アイルランドの修道者たちである。既に6世紀の40年代までに、350以上の修道院が生まれていたとされるアイルランドであるが、アイルランドの修道士たちの特徴として、ペレグリナティオが挙げられる。そのペレグリナティオの実践として、6世紀末にコロンバヌスに率いられたアイルランドの修道者たちがガリアに渡ってくるようになったのである。もちろん、彼らが最初の集団ではなかったようであるが、彼らはフランスの東部まで深く入り込み、リュクスィーユ修道院、フォンテーヌ修道院、アングレイ修道院を設立した。コロンバヌス自身は、フランク王族を批判したためにリュクスィーユ修道院を追放され、北イタリアのボッピオに修道院を設立し、そこで生涯を閉じた。彼と彼の弟子たちによって設立された修道院では、コロンバヌスが編纂した修道規律が遵守されたという。ペレグリナティオは、8世紀中期から批判されるようになり、後に教会会議においてそれが禁止された。それはまた、修道士の定住を規定していた聖ベネディクトゥス規律が普及をみたからでもあろう。ヌルシアのベネディクトゥス(480-543)がモンテ・カッシノ修道院で執筆した規律は、7世紀頃からフランス中・北部の修道院でコロンバヌスの規律とともに併用されるようになってゆくのである。

## III 大陸における修道院の設立

8世紀になると、今度はボニファティウスに率いられれたアングロサクソン人の修道士たちが、

大陸の地で修道院を創設し、修道制が展開することになる。もともと彼らは、ゲルマンの土地にキリスト教を伝導することを目的としてブリタニアを出発したのであったが、その際に当地で修道院を建設した。ボニファティウスは、744年にフルダ修道院を設立し、修道士たちにベネディクトゥスの規律の遵守を義務づけた。しかし、規律は大陸の修道院全体に挙に普及する結果とはならず、779年のカール大帝によるヘリスタル勅令が、ベネディクトゥスの規律を、修道院の規律として一律に採用するきっかけを作った。

さて、このように、布教と同時に進行した修道院制度であるが、布教という制度を持っている以上、また、修道院内部においても聖体拝領を行うためには、司祭が必要であり、修道士でありながらも司祭職となるものがいなければならなかった。K.S.フランクによれば、西欧の修道制は、修道士共同体と聖職者共同体という二つの秩序の存在があり、それが交錯し、移行し得たところに特徴があるという。また、中世初期に未開地に建てられた大規模な修道院は、中世の修道制における新機軸でもあったという。古代末期には、遁世という考えのもとに、都市から離れた修道院ができた。この考えはずっと存在し、後にシトー修道院の実現をもたらすのであるが、8世紀のフランク王国の修道院は、このような修道制と異なる環境をもって設立したのであった。つまり、未開の地に修道院都市を成立させて、それを教会生活の新たな中心にしたのである。宣教という狙いを含め、教会政治的な計画がそこに存在したとよいだろう。

このような中心地は、教会が機能する都市となっていなければならなかった。それには、多数の修道士を集め、大きな修道院集落を擁した修道院共同体のための経済的基盤が必要であり、禁欲生活もまた、かつての修道者の生活と異なった方法を模索する必要があったのではないかと思われる。このような修道院として、先のボニファティウスのフルダ修道院が挙げられよう。

#### IV 2つの修道院改革とシトー会修道院

その後、私有教会制の弊害や世俗人との無益な関わりを憂い、修道院の改革が始まる。10世紀のクリュニーに始まる改革がそれである。時を同じくして、クリュニー会の修道士であったヒルデブラントが教皇グレゴリウス7世となり、教会改革と同時に世俗の王に対する教皇権確立を押し進めることになった。クリュニー修道院改革に関しては、さしあたり、その特徴として以下の2点を挙げておきたい。教皇の直接の保護を受け、典礼を重視して修道生活を行おうとした点。そしてクリュニーを中心とする包括的な修道院連合の創設である。しかし、クリュニーの修道院改革も、12世紀には修道制の原点に回帰するという、修道院の本来のあり方を再考した修道院の設立によって、さらなる変革をもたらすことになった。その新たな修道院改革の一端を担ったのがシトー修道院であり、今回の報告の中心となる修道院の一会派である。

#### V. シトー会修道院の経済活動

##### 1) グランギア経営

シトー修道院は1098年にモレーム修道院長のロベールが、モレーム修道院を12名の修道士を引き連れて飛び出し、シトーの地に修道院を建設したことがその始まりである。シトー修道院の目標は、クリュニー会のような典礼重視の修道院とは異なる形態を持って修道生活を営もうとしたことにあり、額に汗して働く労働を自らに課すことを規則で定めた点にその特徴がある。また、シトー会に属する修道院は、グランギアという経済主体を持ち、本院の他にグランギアをいくつも所有して、助修士による共住生活を行わせた。他の修道院のように、農民、農奴のいる荘園を所領としていたものと異なる経営形態である。このグランギアこそ、シトー会修道院の経済活動の基盤として大きな意味を持つものであった。グランギアには、居住するための設備の他に一連の農業経営施設、つまり、穀物倉庫、地下貯蔵室、家畜小屋そして作業場のような施設があったといわれている。豊かなグランギアは、フェーデや戦争で略奪行為を受けることもあったから、外部の世界から土堀や石垣によって隔離され防備されたこともある。修道院の中には、グランギアを創設した後、開墾や干拓をして農地を拡大した例もあり、この例が、余りにも特異であったため、シトー会を開墾修道会とも呼ぶきっかけを作った。

13世紀におけるいくつかのシトー会修道院のグランギアの数を挙げておくと、以下のようになる。

アイフェルのヒンメロートは 13、ニーダーザクセンのヴァルケンリートは 17、ボーデン湖北のザーレムは 20、ニーダーザクセンのロックムは 10、下ラインのアルテンベルクは 14、ライン中流域のエーバーバッハは 16、バーデンヴュルテンベルクのマウルブロンは 20、ワーテルロー近隣のヴィレールが 20、リエージュ近隣のヴァン・サン・ランベールが 9、ブルゴーニュのクレルヴォーは 20 といったところである。たいていのグランギアは、12 世紀に設立され完成されているものが多い。13 世紀からは直営地農場であるグランギアの建設は少なくなる。グランギアが極めて少ないシュタムス修道院の例などもあるが、13 世紀以降は修道院による自家経営が減少する傾向を持つのが一般的である。また、所領の小作は総会で禁止されていたのだが、所領を農民に小作させるケースは多くなっていた。いずれにせよ、グランギアは修道院の所領の一部とはいえ、農業経営上の自家生産拠点として大きな役割を果たす組織であった。

## 2) 農場の広さ

12 世紀に設立されたグランギアの多くは、比較的広大な面積を持つものが多い。また、グランギアの広さは、経営を行う地目によって異なっていた。特に放牧を目的とするグランギアは、広大な面積を有している傾向が強かった。13 世紀には、新たに土地を購入したり、獲得した村落を放牧地に変えることによって所領をさらに拡大させるケースもあらわれる。レーゼナーの研究によれば、ザーレム修道院の家畜飼育を行う 4 つのグランギアは、平均して 230ha の面積をもっており、牧羊を行っていたグランギア・アルトマンシャウゼンは約 500ha の広さの放牧地を、マダッハの農場は 469ha の広さがあったという。エーバーバッハ修道院のグランギアの場合は、各グランギアが 600ha から 1500ha くらいの規模でそれぞれ異なっているが、平均して 1 グランギアあたり 354ha の大きさであったとされる。ロックム修道院は、およそ 10 あるグランギアのうち、2 つのグランギアが広大であった。コーレンフェルトが 600ha、オエデルムが 500ha である。また、ヴァルケンリート修道院のグランギアは、リートホーフが約 315ha、ノイホーフが 180ha 以上、メンヒスピッフェルホーフは 300ha を越える耕地を所有している。注目すべきは、フランドルのデューヌ修道院のグランギアで、その広さは、最小で 300ha、最大のものは 2600ha あったと言われる。また、ぶどう栽培に利用された用地では、傾斜地の集約的な利用が可能であり、モーゼル川、ライン川近郊の修道院は、ぶどう酒を製造し販売をするためのぶどう畑をあちこちに所有していた。

## 3) 修道院経済・グランギアの担い手

次に修道院における経済活動の担い手について見ておきたい。修道院やグランギアにおいて経済活動の実践的役割を果たしていたのは、主に助修士たちである。彼らは修道院内の作業場やグランギアの作業場で生活し、主に農作業を行い日々を過ごす。余剰生産物を販売し、必需品を購入するために市場に出かけて行くのも彼らの役割であった。修道院においては共誦祈祷修士も手の労働を行っていたけれども、聖務日課が助修士のそれとは異なっていたので、労働にあてる時間も助修士とは異なっていた。シトー修道会の修道院経済のもう一つの特徴は、この多数の助修士たちによって組織的に営まれた農業活動にある。ちなみに、一修道院に属する助修士数の例をいくつか挙げてみると以下ようになる。13 世紀初頭においては、ヒンメロート、クレルヴォー、アドゥアルトに、およそ各 200 名の助修士が、13 世紀後半から 14 世紀初頭にかけては、ヴァルケンリートに 180 名の助修士、ザーレムには 160 名の助修士がいたとされる。また同時期に、ヴィレール修道院は、100 名の修道士と 300 名の助修士、デューヌ修道院は、180 名の修道士と 350 名の助修士がいた。このような多数の助修士を抱える背景となったのは、シトー会修道院の宗教的役割のせいだけではなく、12 世紀における社会変動、すなわち農業生産性の向上や西ヨーロッパ人口の増加、都市の発展と無関係ではない。特に人口の増加は、人々をより良い条件の土地へと、また発展してきた都市へと移動を可能にしたので、このような社会変動の中でシトー会の助修士へとなる者が増加したと考えられる。しかし、助修士の増加はグランギアの増加を招き、やがて修道院の規律による統制をも弛緩させることになっていった。

グランギアは、グランギア長(*grangiaris*)の指導の下で経営管理され、グランギア長が修道院の財産管理係(*cellerarius*)か総務(*procurator*)から指示を受けつつ、グランギアに関する全責任を修道院長に対して負っていた。財産管理係は、倉庫係、資材係として古来重視されてきた役職であり、聖ベネディクトゥスの規律の 31 章にも当役職に関する指示があるほど、重要な役割を担っている。

12世紀半ばには、主任財産管理係(maior cellerarius)と副管理係(subcellerarius, minor cellerarius)という2つの役職も現れる。1152年の修道院総会規定では、主任財産管理係は、会計責任者として月1回、あるいは修道院長が望むときには、しばしば、あらゆる収入と支出について修道院長に会計報告をすることが決められている。会計係(bursarius)という役職も13世紀には登場する。シトー会修道院の会計記録については、イングランドの修道院に比較的詳細な史料が残されている。既にノウルズが指摘しているように、キングスウッド修道院では、1240年頃には会計係が存在し、会計の1年を、聖ペテロの鎖の祝日(8月1日)から聖アンドレアの祝日(11月30日)までとそれ以外との2期に分けていた。決算は、年一回の8月1日である。ボーリュウ修道院は、cameraと呼称される管財係りが責任者であり、年4回、修道院長立ち会いのもと、全体の会計監査を行い、年1回はすべての役職者とグランギア長がそれぞれの会計を提示することになっていた。

#### 4) 農業生産物

グランギアの生産物についても、会計文書同様に、修道院全体、あるいは各グランギアに関する数量的な叙述が余り残されておらず、特に12~14世紀の事情に関しては、具体的な数量や規模を確認するのは困難である。そこで、証書史料や裁判記録などからグランギアの規模を推し量るしかない。1379-1381年にヴァルケンリート修道院のグランギアはフェーデに巻き込まれ、2度も略奪されている。その被害に関する史料において、ベルビスレーベンのホーフは、38頭の馬が失われ、建造物も被害を受けた。同じくリートホーフも、70頭の豚、28頭の馬、建造物が被害をうけたという記録がある。グランギア・ベリンゲンでは、1379年の価値で500マルクの馬、豚、穀粉、穀物そして他の物品が略奪されたという。ベリンゲンは、1381年にも91頭の馬の損害をそして600頭の羊、36頭の小牛を含めた雌牛そして130頭の豚が被害を受けた。ヒンメロート修道院には、1421年の史料からグランギア・ミーゼンハイムに115頭の羊、24頭の小馬、9頭の子馬、12頭の雌牛、3頭の小牛、そして23頭の豚がいたことが判明する。シュタムス修道院では、1333年にグランギア・タンにおいて、15頭の乳牛、31頭の子牛、8頭の雄牛、8頭の馬、42頭の羊、24頭の豚を所持していた記録がある。また、修道院農場にも81頭の乳牛、52頭の牛、44頭の豚、90頭の羊などを飼育していた。

## VI シトー会修道院と商業活動

修道院やグランギアで生産された農業生産物は、自家生産・自己消費という理念を貫けず、市場向けになっていったことは言うまでもない。その事情は既に1134年の総会決議録の51章「売買について」から推察しうる。そこには、市場への参加や訪問は許可するものの実際の商取引は行っていない。取引は、修道会規定が容認している商品のみ行えることに留意し、販売にあたっては、地金か貨幣で行われねばならず、市場訪問は、3日か4日の行程離れている市場のみ許される。市場へは、一修道院から修道士か助修士2人だけしか行くことは許されなかった。また、定期市に行くために海を渡ってイングランドまで行くことはできない等の指示が示されている。このような指示は、以降、再三にわたって総会で示されたのだが、その規範が忠実に守られることなく、次第に規制は緩和され、有名無実なものとなった。

### 1) 都市館の所有と農産物の販売

グランギアや修道院において生産された穀物、ぶどう酒、家畜、羊毛は、市場での販売を通して貨幣収入を可能にしていた。もともとは、当会の初期の規定により、俗人との接触を極力避けることが定められていたが、既に初期の修道院でさえ、修道院が絶対的に外部に依存しない独立した経済を営み得ないことは、明かであったから、1134年の規定でも、近くの町に貯蔵所や倉庫を建設することは許可されていたのである。

そこで、シトー会修道院はしばしば都市の中にも土地を所有し、そこに都市館を所持していた。修道院やグランギアで生産された余剰生産物は、この都市館を拠点にして貯蔵、販売された。また、修道院長や修道士たちの宿泊所としても機能していた。都市館は、修道院の農工業と都市における交換経済との間の接点となったのである。都市館の意義は、都市館がある都市とその数を見るだけでも、それがいかに重要であったのかを推察することができよう。ドイツにおけるシトー会修

道院の例を挙げると、例えば、ヒンメルロート修道院は、9つの都市に都市館を所有しており、中でもトリーアー、ケルン、そしてコブレンツの都市館は、農業生産物の販売拠点として、大きな役割を果たしていたと思われる。また、ケルンは、ニーダーラインのぶどう酒の積み替え地として重要な地点であったから、ぶどう酒の販売のために都市館は重要な拠点となったはずである。実際、ケルンには、エーバーバッハ、ハイスターバッハ、マリエンシュタット、カンブ、アルテンベルクなど他の多くのシトー会修道院が都市館を設置している。トリーアーは、ヒンメルロート修道院のグランギア、ヴィンターバッハ、シェーンフェルト、ランゲンボルンにとって最寄りの余剰生産物（家畜、穀物、皮革）の市場であった。

ボーデン湖畔近郊にあるザーレム修道院も、ユーバーリンゲン、コンスタンツ、ウルムなど、近隣10以上の都市に都市館を所有しており、これらの都市に穀物、家畜、ぶどう酒、塩といった修道院の生産物の販売を行っていたと推察できる。ヴァルケンリート修道院では、付近にある6つの都市（ゴスラー、ヴェルツブルク、ゲッチングェン、ノルトハウゼン、オステルヴィーク、ケルブラ）に都市館を所有し利用した。ヴァルケンリートは、1178年以前にノルトハウゼンの土地を寄進され、そこに都市館を持つようになったが、当地は、上部ヘルメ地域におけるグランギアの生産物の中心市場となった。グランギア・シャウエンは、その生産物がほとんどが近隣の都市オステルヴィークの市場で販売されていたため、都市市場での販売を意識して、グランギアを特化したと考えられる。

1180年の修道院総会規定において、都市館に助修士が留まることが許され、1182年には、ぶどう酒の販売を禁止する規定が緩和されることになった。俗人を介してぶどう酒を卸売することが許され、後には都市館での小売りも許されることになる。同じ館に修道士や助修士が居住することは許されなかったが、都市館の管理者は、後に修道士となる例も多くなり、都市館に関するさまざまな制限は緩和され、当初のシトー会修道院の目標とは異なる状況を生みだしていたのである。

シトー会修道院による農業生産物の市場販売を大きく促進した理由としては、シトー会の内部における規制の緩和ということ以前に、修道院に与えられていた免税特権が挙げられる。あらゆるところで徴収される税金を支払うことなく商品の輸送が行えることは、修道院の生産物の販売にとって極めて有利な状況であった。免税特権は、シトー会の修道院に限ったことではなかったのだが、シトー会の修道院はこうして市場における取引の有益性を考慮するようになっていったのである。

## VII 終わりに

修道生活は、教会内における禁欲の考え方が、3世紀においてその価値を見だし始め、やがて教会外に出てきたという見方がある。つまり、世俗内は教会であり、世俗外の禁欲は砂漠ということになるのだろう。修道生活の理念の中に、*eremus* という概念（直訳すると砂漠とか荒地地という意味である）があり、このような概念が、エジプトの修道制と無縁ではないことは明らかである。しかし、一方で修道院は、フランク時代に世俗の中でその存在を顕示し、12世紀以降の修道院改革では、再び荒地を求めるといった精神的な目的を持つに至った。ところが、そもそも修道院は、世俗との関わりなく存在することが原則的にできず、シトー会修道院の場合には、いったん断ち切ったはずの経済的関係もやはり世俗の市場と関係を持つに至った。フランク時代以降は、世俗の聖職者と元修道士が互いに説教活動を担うことになったと既に述べたが、このような形は、13世紀における托鉢修道会の動きにも当てはまるだろう。フランシスコ会は、ドミニコ会と並んで著名な学者を多数輩出した修道会であり、1209年に教皇が修道会として承認した修道会である。これら都市生まれの修道会は、学問を重んじ、ふたたび時代に即した活動をもってその存在を知らしめることになる。ボナベントウラ、ロジャー・ベーコン、ドン・スコトゥス、ウィリアム・オッカムといったフランシスコ派の学者は極めて著名である。しかし、フランチェスコ自身は、商人の息子であってそれほど高い教育を受けたように見えないし、周りに集まった物も、文字の読めない人もいたといわれている。フランシスコ会は、従来の修道院の聖務日課とは異なる規定を考えていたが、福音の言葉を実践するということは、福音を述べ伝えることでもあり、そのための知識が必要となったのであろう。

その後、時代が進むにつれ、ドイツにおいても都市における経済の拡大があったり、ペストによ

るカタストロフ、宗教改革などが発起し、修道院も大きな影響を受けることになった。国によっては修道院が解散されもした。しかし、修道院の経済活動や研究活動を見てゆくと、一見、世俗と無関係な宗教的・歴史的遺産のように思われがちな修道院も、各時代において何らかの貢献があり、それによって生かされてきたようにも思われるのである。そういう意味では、修道士自らが経済活動に携わったとされるシトー会士の活動を考察することと、イタリアのフランシスコ会士、パチョーリの聖界・俗界での活躍とは、何らかの関係をもっていると言えるのではないだろうか。

The **IPACIOLI** **SOCIETY** **JAPAN**

---

日本パチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783  
The Institute for Management and Accounting/Takushoku Univ. Miyokawa Office